



アタシに花は似合わない

志津

アタシに花は似合わない

志津

登場人物

ステラ・ミリガン	中央第三地区の刑事
オリバー・ニューマン	新米刑事
マーガレット・メイソン	警察署内勤
トム・グレイ	警部
ケネス・キングス	夫婦惨殺事件の被害者
ジャニス・キングス	ケネスの妻
モーリス・キャロル	夫婦惨殺事件の重要参考人

CASE 01

「ステラ、午後はオリバーを連れて、まだ聞き込みが済んでいない住宅を回れ」

「警部、お言葉ですがアタシたちも重要参考人の捜索に加えてください。そのほうが——」

「今回の捜査権限は私に一任されている。優先順位を決めるのは君ではない……わかるな」

「……はい」

「グレイ警部、資料室からファイル持ってきました」

鳴り響く電話の音や、職員の話で部屋中が埋め尽くされている中、アタシと上司グレイの間に漂う張りつめた空気を破ったのは、寢癖が残った髪、常に眠そうな顔つきをした男。去年からアタシとコンビを組んでいる新人のこの男は、グレイの顔を伺い、少しだ

け目を丸くしてみせる。タイミングが悪かったのを察したらしい。

「オリバー、遅い」

「す、すみません」

「ステラ、あとは君が伝えろ」

グレイは整髪料で撫で付けた髪を一度手櫛で整えたあと、ニューマン——アタシは異性のことはファミリィネームで呼ぶようにしている——からやや乱暴に資料ファイルを掴みとり、ドアの向こうへと消える。残されたアタシに、ニューマンは気まずそうに眉を下げながら、

「あの、ミリガンさん。俺たちはなにを」

「聞き込み。昨日も不在だった家が何軒か残っているから、午後からアタシたちで行けって」

「あ、そうなんです……じゃあ俺、先に行つて車回してきます」

「……よろしく」

中央第三地区警察署。今朝は晴れ間が出ていて幸先のいいスタートだったけれど、天候の変わりやすいこの

国では昼前にも太陽が出ているとは限らない。廊下から窓越しに外の様子を伺ってみれば、案の定空はアスファルトを映し出しているような、鈍く冴えない調子だった。

エントランスでニューマンを待っていると、同期で内勤のマーガレットが、簡易包装された花束をいくつか抱えてやってきた。切り花なのにまだ瑞々しさが残る、鮮やかな色合いの……バラくらいしかわからない。白だとかピンクだとか、自分ではチョイスしないカラーリングが眩しい。

「ハイイ、ステラ」

「マギー。どうしたのそれ」

「今日総務のジェーンの結婚式だったじゃない」

「え……ああ、そうだったっけ」

「そうそう。さっき参列してきた子たちが持つてきてくれたのよ。幸せのお裾分けってやつ。ほら、あなたの分もあるわ」

そういいながら、マギーは花束のひとつをアタシに差し出す。鼻腔に嗅ぎ慣れない香りが一気に進入して

きたのに驚いてしまい、アタシはマギーが寄越してきた左手を花束ごと押し返し、

「勘弁して。そういうの貰っても困るから」

「ええっ。嫌いだったっけ」

「嫌いというか、苦手」

「あなた顔つきは派手なくせに、なんというか……似合わないこというよね」

「女はみんな花が好き、つてわけじゃないでしょう。」

あと、見た目が派手つてのは余計。自分でも気にしてるんだから」

自分でもいうのも変な話だけど、アタシは自分の顔で損をすることが多い。特に目。意識していなくても目力が強いらしく、学生の頃は男女問わずやたら絡まれた。もちろん悪い意味で。

そして成長するにつれ、無駄に発達してしまった胸部のせいでさらに面倒な目にも遭ってきた。そんなワケで、今アタシの目の前にいる、一見突出した特徴が見受けられない、ウェーブ取れかけなブルネットのマギーの顔や身体つきが本気で羨ましい。と、一度飲み

の席で本音をこぼしたらマジ切れされたから、二度と本人にはいわないと個人的な誓いを立てている。

「あのさ、整形費用貯めてるってマジなの」

「そう。もつと地味な顔にしてみらうの。髪はどんなに強い染料使っても染まらないから、ウィッグで我慢かな」

「どんな髪よそれ。ていうか、仕事が恋人とかいえば聞こえはいいいけどさ、真面目も度が過ぎるとただのバカね。そんなんじゃ婚期逃すわよ」

出世できないのは顔の故^せとまではいわない。産んでくれた母に申し訳なくもある。けれどもし罔捜査の必要性が出てきた時に、目立つという理由で外されるのは困る。これ以上、遅れをとりたくないのだ。

「お節介はまた今度にして」

「ちよつと、どうすんこれ」

「エントランスにでも置いておけば」

「うーん……ま、捨てられるよりマシか」

「あとなんでもいいけど、今日かけてる眼鏡、旦那のと間違えてる」

「うつそ、マジで」

「フレーム左側のシリアルナンバーが違う」

「へえー、よく見てるのね」

「刑事だし」

アタシとマギーが互いの顔を見やり思わず笑つていると、ニューマンが迎えにきた。外回りに出る時、運転するのは彼の役目だ。

「ミリガンさん、お待たせしました」

「よし、行こう」

「いつてらつしやい」

マーガレットの見送りを背に、アタシたちはグレーのセダンに乗り込み、警察署をあとにした。

「時間も時間だし、先にランチ済ませよう」

「はい。昨日と同じところでもいいですか」

「ええ、急ぎましょう。法定速度内だね」

アタシとニューマンは、一昨日発生した殺人事件の現場に一番近いパブへと向かう。中央第三地区は元々学生街で、似たり寄つたりなオフィスビルの間を縫うよ

うに歴史ある大学から、最近開校した大学まで軒を連ねている。目的地は署から車で三〇分からない距離にある住宅地。

そこで暮らす新婚夫婦、ケネスとジャニスが揃って自宅のリビングで殺されたのが一昨日の夜二時頃。ちょうどアタシとニューマンが仕事を切り上げ、帰宅途中でその知らせが届いた。

「リビングにグラスが三つあったことは、やつぱ犯人は夫妻と親しい関係にあった。って感じなんですかね」

「というか、警部はもう犯人の目星がついているんでしょう」

「えっ、マジですか」

「ちゃんと前見て運転して」

「あ、すいません」

赤信号で停止した車内、目の前の横断歩道を忙しなく横切る人の波を眺めながら、今回の事件の内容を振り返る。被害者夫婦はふたりとも二六歳——確かニューマンと同じ年だ——で、遺体や部屋の状況から推察する

に、リビングで遅めのディナーを誰かと囲んでいた時、カトラリーで刺殺されたというのが有力な線だ。

「昨日行った家の中で、留守の人たちが何人かいたでしょう。その中のひとりは被害者たちと友人関係にあるそうなのだけど、昨日の夜もアパートに戻っていない。在学中の大学に確認してみたら、昨日今日とどの時間帯も講義には出ていないって」

「……それって、そいつが犯人ってことですかね」

「まだ重要参考人の域を出ていないけど、上はそう見ていると思う」

「じゃあ、早くそいつ捜すほうがいいじゃないですか」

「他にもまだ聞き終えていないところがあるでしょ。

週末で留守のとも少なくないし」

「だからって俺らにやらせることないじゃないですか

……」

「アンタはまだ新人なんだから、上の連中みたいに動けなくて当然じゃない」

「でも、俺はそれでもミリガンさんは」

「ニューマン」

コイツの不満はわかる。去年配属となったニューマンとコンビを組まれて以来、アタシたちは捜査の中心には入れてもらえないでいる。理由はまあ察しがつく。アタシが所属する部門には出世欲が強く、年功序列を重んじる傾向が強い連中が多い。人より二倍身なりを整え、品よく振る舞ってみせているグレイ警部もそうだ。おまけに女嫌いときた。

アイツらにとって、女や若輩者が自分たちより前に出ることは好ましくないのだろう。

「聞き込みは大事な仕事よ」

「いや、まあ、それは理解していますけど……」

「ほら、信号変わる」

「あ、はい」

車がゆつくりと発車しだす。運転の妨げにならないよう、私は口を閉じサイドミラーに視線を滑らせる。そこには押し殺せない不満を燦らせる女の、目尻のキツい紺色の目が映っている。

結局のところ、今の境遇を一番気にしているのは自分には他ならない。

ほどなくして目的地のパブに辿り着いた。この店舗は現場まで歩いて五分程度の場所に位置しているから、昼食を摂り次第すぐ仕事に取りかかれる。けれど時計はちょうど正午を指している。

昨日は時間がずれていたから比較的空いていた店内が、今日は近所の住民たちから、近くのおフィスからやってきたらしいビジネスマンの姿で埋まりつつある。それでもニューマンが素早くテーブルを確保してくれたおかげで、どうにか一息つくことができた。『フィッシュ・アンド・チップスにジャケットポテト、あとは……』

ニューマンはアタシが席に着くと、すかさずカウンターに移動しメニユーの注文をしている。猫背気味な背中になしくたびれ始めたジャケットが気になるところである——注意しても愛想笑いで流されるから言うだけ無駄だ——けれど、人当たりもよく、愚痴を漏らしても仕事への熱意を欠いているわけではない。あとこれはアタシにとって一番重要なことで、アタシの

パーソナルスペースへ許可なく踏み込んでこないのが彼の一番いいところだ。

私生活や趣味趣向について必要以上に詮索しないし、性別問わずニュートラルに接してくる。コンビを組んでいても、余計な摩擦やストレスを生み出さないから楽だ。過去にセクハラやパワハラを働いた上司やら後輩に辟易していたから、与えられる仕事の内容に不満はあっても、身近な人間関係で悩むことが減ったのは好都合だった。

ただ、今日のランチのように向かい合って食事を摂る時、たまに大口を開けた拍子に白目をむくのは正直不気味だから止めてもらいたい。当の本人に何度伝えても無意識のうちにやっているから、改善しようがないのが困りものだ。それでも煙草の匂いが染みついている彼の車の中で、並んでチャイニーズデリをつつくよりはマシ、と思うことにしている。

当の本人はアタシの迷惑に気づく様子も見せず、呑気にランチを胃に流して混んでいる。食事をする様子はどちらかというと事務的で、きつと少しでも早く外

で煙草を吸いたいのだろう。嫌煙家のアタシに対して相手はヘビースモーカー。壁際のテーブルを囲むアタシたちのすぐ隣で *No Smoking* のラベルが監視でもしているかのよう。

「そういえば、第九地区の方で警官が重傷だそうですね。マフィアの抗争に巻き込まれたとか」

「こつちじゃ考えられない事件ね……」

「……俺たち、一〇年後もこんな調子で仕事してるんですかね」

「なに、急に」

「いや……」

「犯罪者検挙しまくって、早く出世したいとか」

「いや、うーん」

「将来が不安なの」

「……まあ、不安がないとはいえませんが」

「そう。だけど、本当はアタシたちが忙しく仕事こなしているって状況自体不自然なんだから。最近はこの辺も物騒な事件が続いているし、アタシとしては前線ですっかり仕事したいけれど、それ以上に早く静かに

なつてほしいかな」

と、ここまで話したところで、ふと視線を自分の皿からニューマンへと移動してみると、なぜか真顔でアタシを凝視している。大変居心地がよろしくない。

「なにその顔」

「……すいません。ミリガンさんがそういう風に考えてるの、少し意外だったんで」

意外と言われた意味が汲み取れず首を傾げると、ニューマンは視線を泳がせながら、

「もつと凶悪犯罪者を検挙しまくって、上にのし上がろうつてもくろんでいる野心家なタイプなのかと」

「アンタアタシのことなんだと思ってるのよ……ま、一〇年後のことなんて誰にもわからないんじゃない」

ジロリと一瞥してやると、ニューマンが申し訳なさそうに肩をすくめる。これでこの話題は終わりにしよう、止まっていたカトラリーを動かし始めると、ニューマンが再び口を開く。

「そういえば、ミリガンさんはなんでこの道に進んだんですか」

「なに、今日は変な質問ばかり」

「そういえば聞いたことなかったなつて」

「……人に話すようなことじゃないから」

アタシはこれ以上お喋りに付き合う気にはなれず、目の前の皿に集中する。ニューマンも食事を再開し、咀嚼したポテトを薄い紅茶で流し込むと、早々に車へと戻っていく。アタシは早く仕事に戻りたいというはやる気持ちをおさえ、せめて彼が煙草の一本くらい心置きなく吸えるよう、カフェラテの残りはゆっくり片した。

聞き込みを再開したところ、運がいいことに昨日不在だった人たちはほとんど在宅していた。ただひとり、例の被害者と親しかったという大学生を除いて。時間を置き、アタシたちは一七時頃改めてキャロルが住むアパートに向かった。けれど相変わらず家主は留守。ポストに溜まった郵便物にも手付かずで、キャロルが帰宅した形跡は見当たらない。

ところが、アタシたちが署に戻ろうと車に乗り込んだ時、アパートの道路を挟んで真向かいに位置する、遊具の種類が乏しい小規模な公園に、妙な人影を見つけた。ベンチに座り、しきりにアパートの様子を伺うスーツ姿の男の姿。張り込みをしている署の人員の顔ではない。

「ニューマン。あそこにいる男、見覚えはある」

「……いや、見たことないですね。署内の人間じゃないさそうですけど」

「そう……ちよつと話しかけてみましょう」

「えっ」

アタシはニューマンの返事を待たずに車を降り、道路を横断して公園に足を踏み入れる。ベンチに座る男はアタシが接近しているのに気づくと、立ち上がってこの場を去ろうとした。公園の出入り口はひとつしかない。必然的にこちらにやってくる男の顔を観察してみれば、双眸がやけに充血している。

アタシはすかさず男に話しかけた。

「すみません、少しよろしいでしょうか」

自分が着ているレザージャケットの前、裾をめぐり、内ポケットに潜む身分証明をちらつかせてやれば、男が息を呑んだのがわかった。自分の中でなにかが訴えかけてくる。コイツには、きつとなにか……。

「アナタ、そのベンチに座ってあのアパートのほうを見ていたようですが、なにかあるんですか」

「べ、別に……刑事さんの手をわずらわせるようなことはなんもしちゃいないよ」

「アタシは話を聞きたいだけです。キャロルという大学生がここ二日間帰宅せず、大学にも顔を出していないとのこと……なにかご存知ありませんか」

「し、知らないですよそんな男」

引つかかった。口を滑らせてから自分でもミスに気づいたらしい。男はアタシの顔を見ながら表情を変え、しきりに辺りを見回し始める。

「キャロルが男だなんて一言もいつてませんけど」

「ぐっ……」

「もう一度聞きます。アタシはキャロルという大学生について話を聞きたいだけです。それ以外のことに関

して、今はなにも話さなくて結構ですから。ご協力いただけませんか」

我ながら強引かつ危険なやりかただとはわかってい
るものの、このままコイツを逃すのだけは避けたい。
アタシと話し始めてからのこの男はやけに落ち着きが
なく、顔面にはうっすら汗まで浮かべている。単に刑
事と会話して緊張しているとか、そういう類いの輩で
はないと、自分の中で警鐘が鳴り響く。キャロルの失
踪に加担していてもそうでなくても、なにか後ろめた
いことを秘めているのは確かだろう。

「ミリガンさん」

アタシの背後で様子を見ていたニューマンの声にも
緊張が混ざっている。陽が沈んでしばらくたつから、
アタシたちを取り巻く空気は肌に刺さるかのようにな
ってきた。そしてほんの少しの沈黙ののち、なぜかひ
とつだけ点いていなかった公園内の街路灯に光が灯つ
た時、男はそれを皮切りに口を開いた。

「キャロルってガキ、去年からうちに流れてくるブツ
の仲介役やつてんだ。それが、期日は一昨日だったつ

てえのに、それがいつまでたつても届かねえ。だから
俺はボスの命令で催促しにきたんだ。そしたら、奴は
この騒ぎでよ……」

「アナタたちも彼を捜しているつてこと」

「ああ、そうさ……なあ、これ以上は俺に話せること
はないよ。だからさ刑事さん」

「ねえ、最後にひとつだけ教えてほしいのだけど。仲
介役がブツとやらを回収するとしたら、場所はどこに
するの」

「えっ……それは……場所つてもなあ……」

「大まかな位置で構わないから」

男はアタシとニューマンを交互に見やり、聴き取り
きれない声量でなにかブツブツと呟いたのち、辺りを
警戒しながら耳打ちをしてきた。

「中央地区」ではまずやらねえ。アンタたちの総本山が
あるところで、素人使つて取引なんてできねえからな
……キャロルにはその辺よく言い聞かせてある。そう
いう奴が片足突つ込むとしたら……あとはわかるだろ」

耳元に届く男の吐息に内心鳥肌が立つたけど、この

男から今聞き出せる情報はこれくらいだろう。アタシは男に一度頷いてみせてから、公園の出入り口への道を空けるように身体を引いた。男はすぐさまこの場をあとにし、アタシとニューマンだけがこの場に残った。「ミリガンさん。あの男の言い分、本当に信じちゃうんですか」

「アタシは命令通り聞き込みをしただけよ。それに今の話が本当なら、キングス夫妻の遺体……精神状態が不安定な人間の犯行の線で考えれば、全部繋がると思うんだけど」

「はあ……」

「とにかく、アタシたちが介入できるのはここまで。あとは報告……そしてグレイ警部次第ね」

今日の昼の時点で有力な情報はなく、無線でもその後の進展は流れてこなかった。今得た情報以上のものが出てこないのならば、ひとつの可能性として十分あり得るだろう。

「となれば、急いで署に戻りましょう。グレイ警部にはアタシが電話するから」

「はい。でも、どうしたんですか。戻ってから口頭で説明するんじゃないんですね」

「もしきつきの男の話が本当なら、キャロルが今潜伏している場所が、ドラッグの売人よりも厄介な輩が蔓延っている可能性が高いからよ」

ニューマンの車で警察署に戻る道中、捜査本部にいたグレイに「聞き込み」で入手した情報を報告した。結果、その日の内にキャロルは見つかった。場所は南東第九地区。表向きは繁華街とされているが、その実態は、世界中から犯罪者や行き場のない難民たちで溢れている無法地帯。

そこで彼は死体で発見された。死因は薬物の過剰摂取。彼のカバンからは商品である大量の薬物が発見された。第一発見者は第九地区管轄の刑事で、検死によるとキャロルは死後二日経過していた。おそらくキングス夫妻を殺害したその足で第九地区へ赴き、手元にあった取引用の薬物を摂取したのだろう。衝動的に殺人を犯し

たために気が動転して、判断能力も低下していたのかもしれない。

殺人事件の犯人が死体となって発見されたのは、正直好ましくない結末だ。けれど、もしこのままキヤロルが見つからず、未解決事件として処理されてしまうようなことになったら、それこそ後味が悪すぎる。そう自分に言い聞かせていると、帰宅前のマギーがロツカールームにやってきた。アタシの様子を見て察したのか、

「なんていうかき、こういつちやなんだけど、自業自得って感じがするよね」

「マギー」

「だってさ、犯人は自分と仲良しだった友だち夫婦を殺しちゃってるのよ。同情の余地ゼロよ」

「それは……否定できないけれど」

「それに、あなたが得た情報で犯人の居場所が特定できたんでしょ。悪いことばっかじゃないじゃん。むしろお手柄ってやつ」

「それを決めるのは上の人で、アタシじゃないよ」

「うっ。そう言われちゃうと、流石のわたしもこれ以上フォローのしようがないんですけど……」

マギーの最後の一言に思わず笑ってしまう。友だちの厚意をこれ以上無下にする意味はない。彼女とアタシは部署は違っても、警察という組織に属しているのだから、アタシが抱く憤りや、やるせなさに似たなにかを体験しているのだろう。

「ねえ、夕飯食べにいかない。旦那出張中で家に誰もいないのよ」

「いいけど、外泊なのに眼鏡違うんじゃない、旦那さん仕事しにくそうね」

「大丈夫よ、視力ほぼほぼ同じだから」

なにそれ、と笑いながらアタシはカバンをロッカーから回収し、マギーを連れて外に出る。すると、ドアの前にちょうど誰かが立っていたのか、相手に思い切りぶつかってしまった。

「っ、すみませ……グレイ警部」

「ステラ、ここにいたか。探していたんだ」

グレイ警部がいるとなると、自然と背筋に力が入る。

が、このあまり関わりたくない上司から切迫した様子が見て取れた。自分の声のトーンも自然と下がる。

「アタシを、ですか」

「オリバーを見なかったか」

「ニューマン、ですか。彼は先にレポートを提出して上がったと思いますけど」

「わたし上がる前に見ましたよ。遺体安置前でうろろしてたから、声かけたらさつきと帰っちゃって」

「なら、奴はもうここにいないのか」

「彼がなにか不備でも」

「不備どころの話ではない。これを見ろ」

グレイ警部が焦れた様子でアタシに差し出してきたのは、キャロルの遺品として回収したスマートフォンスマートフォンの通話記録だった。そこには、アタシも暗記してしまっている番号が一件ある。日付は三ヶ月に一回きりと間が空いてしまっているが、その番号の主は間違いないニューマンだ。

「どういうことですか」

「それを本人に問いたださなければならぬ。今キャ

ロールとオリバーの経歴を洗い直している。過去になんらかの接点があるかもしれないからな」

「そんな……」

ただならぬ雰囲気になにか変わったことは、マギーもアタシの隣で呆然としている。グレイは改めてアタシを見やり、

「ここ二日間、オリバーになにか変わったことは」

「特に……自分の将来に漠然とした不安を抱えているようなことは言っていましたけど、でもそれ以外は」

「手がかりが少なすぎるな。とにかく、奴の行方を追ってくれ。私は解析結果を見に行く」

「了解」

グレイは足早にこの場を離れ、アタシもエントランスに向かいながらスマートフォンを取り出し、ニューマンの番号を呼び出す。電源が切れていて繋がらない。

「Global Positioning Systemは」

「電話が繋がらない。追われないように破棄してるかも。探しに行く」

「行くつてどこに」

マギーの問いに対して、悩む間もなくひとつの選択肢が浮かぶ。キャロルの遺体発見現場。薬物中毒の気がある男の言葉。犯罪を犯した者が逃げ込むとしたら、あの場所しかない。

このままニューマンに姿を消されては困るけれど、こういう時に限って車で出勤していない。署の車両はほとんど出払ったままで、かといってパトカーで向かえば面倒なことが起こるかもしれない。しかたなくアタシは、警察署前の大通りでタクシーを捕まえた。

マギーにはニューマンの部屋を確認しに行くよう頼んだ。一緒に来てとは言えない。下手をすれば、アタシもキャロルのようになってしまうから。

南東第九地区へ行くのは初めてだ。中央第三地区からだとは片道一時間というところだろうか。帰宅ラッシュの時間も過ぎていたから、道中の移動に苦労はしなかった。けれど、流石に土地勘のあるタクシーの運転手は南東第九地区と聞いただけで青い顔をしていたから、

地区まで五分程度の路上で降り、そこからは徒歩で向かうことにした。

タクシーのエンジン音が遠ざかり、私の眼前に歪なネオン街が輪郭を露わにした頃、グレイ警部からの着信があった。

『今どこにいる』

『南東第九地区ゲート前で』

『おい、なにを考えているんだ』

『ニューマンがキャロルとなにかしらの接点があるとしたら、彼はここに逃げ込むのではないかと』

『だとしても、君ひとりで行くなんてあまりにも無謀すぎる』

『やめてください。アタシは刑事です。ひとりの刑事として扱ってください』

『こんな時だからこそだな……いや、とにかくゲート前で待機している。すぐに応援を送る。あと地区管轄の刑事にも連絡する』

『……ニューマンとキャロルの接点は』

『一〇歳の頃、半年だけ同じ学校のクラスだったよう』

だ。ニューマンはその後父親の転勤に伴い第三地区を離れたが、うちの署への配属で戻ってきたことになる。おそらくその時再会したのだろう』

たった半年。その間に彼らは友情で結ばれ、離れ離れになり、大人になってから再び巡り合ったとでもいうのだろうか。できすぎた話だ。情報が足りなさすぎて信憑性に欠くというか、結局は本人の口から真相を聞かないと、全て憶測以上のものにはなれない。

『とにかく、絶対無茶はするなよ。これは命令だ。安全な場所で待機していろ』

いつもより強い口調で捲し立て、グレイは通話を切った。耳元に叩き込まれた雑音が消え、周囲の静寂がより強調される。ふと、昼間にバブで会話した時のことが過る。

（あの時、もう少し親身になって質問に答えていれば、今の状況に変化があつた……とは、考えにくいな）

今となつてはどうにもならないことを悔やむのは性に合わない。それになぜアタシが刑事を志したのかを話していたとしても、状況が好転したとはとても思え

ない。個人的な話をしてなんになるのか。

（昔誘拐されて、その時の犯人を自分の手で捕まえたから。だなんて言ってもね）

急いで出てきて、銃を所持していないのが心許ない。でもこのまま待機するわけにはいかない。ニューマンが死体で発見される可能性だつて十分あるのだから。

アタシは身体の緊張をほぐすために一度深呼吸をし、そのまま第九地区のゲートへと向かった。

地区内に入つてすぐ目に入つた、通りの脇に路駐している車はニューマンのものだ。乗り捨てたのだろうか。それとも、今誰かと落ち合っているのか。

周りに人はいるが、今通りを歩いている人たちに關しては特別怪しい印象はない。アルコールの匂いが強いくらい。数え切れないほどの犯罪者がのさばっていると耳にするけれど、そういう輩はむしろ表に出てこないのかも知れない。

初めての土地で勝手がわからないのが、こんなにも

苦に思えたのは初めてだ。とりあえずキャロルの遺体発見現場に向かおうと足を踏み出した時、すぐ左手にある細い路地から口論が聞こえる。まさかと思つて耳を澄ませば、聞き覚えのある声と、あとは低い女の声がある。

「アナタが過去に商品を横領した責任をとつてもらいます」

「お、俺は関係ない、関係ないんだ」

ニューマンの声が震えている。あまり聞いたことのない声色だ。相手の声は抑揚のない、事務的というより機械的な感じ。アタシの知らないところで、よくないことが起きていると肌で感じた。

彼が誰と対峙しているのかを確認しようと、ゆっくり歩を進め、気取られないように身を乗り出した時だった。乾いた発砲音が二発続く。その音が行き着いた先はニューマンの心臓部。被弾した衝撃で彼は膝を崩しながら後方へ倒れる。ニューマンと女が対峙していたその姿を、アタシは横から目撃した。

アタシは反射的にニューマンを撃った人間へと向か

つて飛び込む。突然の攻撃に相手も反応が遅れたらしく、勢いづいたアタシ自身もろともコンクリの壁に激突する。その時の反動で、相手が右手で構えていた銃がこぼれ、かけていたサングラスが外れ地に落ちた。

すかさず相手へ馬乗りになり拘束しようとした瞬間、相手と目が合う。

アタシの目の前にいたのは——アタシだった。

“CASE 01” END

CASE ??

初めてこの街に訪れた時の第一印象は、煙草の灰を集めて山にしたものをいくつか並べたような、お世辞にも好感とは無縁のものだった。可能ならば関わりたくない。その場に立つて呼吸しているだけで、自分の肺が真つ黒になつてしまふそうだから。

けれど仕事となれば話は別だ。厳密に言えば、これはアタシがアタシ自身に課した、生きている間に解決すべきもの。それをクリアするためなら、避けては通れない。

南東第九地区。犯罪の温床と名高き歓楽街。

アタシは、贗作を捜しにここへきた。

「さて、どうすんだ。お前このままおつ死んじまうのか。そうしたいってんなら止めはしない。まあ、こっちの目覚めはすこぶる悪くなるがな」

男はあくまで涼しい顔でアタシを見下ろしている。

いや、涼しいとはまた違うかもしれない。これは、癩癧を起こしている子どもに静観を決め込む父親、とでもいったところか。

傷口から止めどなく溢れ出る体液によって、自分の身体が濡れていく感覚が気持ち悪くなってきた。ただ、この気持ち悪さすら知覚できなくなつてからでは遅い。この男からの問いの答えをそろそろ出さないと。

男の頭上には、真つ白で眩しいくらいのが月が浮かんでいる。いつの間に黒雲が流れていったらしい。どちらも無言を決め込みながら、アタシの動向を見守っている。

アタシは、啗内に溜まった液体を吐き出したいのをどうにか堪えて飲み込み、そして、

アタシに花は
似合わない

発行日 2016/11/23

発行者 志津 | 夜光虫のランプ

表紙 ぬくろっふ | @msmsnu

Mail info@d-nomads.com

Twitter @wanderer_xxx

<http://d-nomads.com/cindex.html>

※ 禁 ・ 無 断 転 載



感想.ioへのリンク用QRコードです。
作品へのご感想等にご利用ください。

夜光虫のランプ